

## 「偶然」の序説

―大岡昇平について―

藤 原 幸 雄

### 一

「偶然」ということばがある。辞書の意味にしたがつて理解してみても、どうにもならぬものを内在しているようにおもわれる。われわれの日常生活においても、浅くは驚きをもち深くは神秘的な不思議さをおわせて使っている。そしてそのニミアンスはそのときどきの状況と人の心にあわせて展開されているのである。どうにもならない理解のむこうには人間と人生とがまちうけて、深遠な生の秘密が不可解にその一端をのぞかせているのである。

それは、単純に挨拶のようにとりとめもなく交わされるときもあれば、またやがて必然の糸と微妙にからんで複雑に意識されているものもある。しかしそれが生と死にかかわるときに、いやがおうでも、偶然の存在を無視しえなくなってくるのではあるまいか。偶然についての哲学的思考をここで重ねようとはおもわない。すでにわれわれは九鬼周造の「偶然性の問題」を読むことができるのだ。

「マルローだったか、死は人間の生涯を運命とかえる、といっている。人間の一生は生きている間は偶然の積重ねなのであるが、死によってそれが必然的關係に組替えられる。死んでみて初めてその人の生涯の意味がわかるはずである。」（朝日新聞 S 42・6・4）

大岡昇平が「死の予感」について記者からの質問に答えてその心情を気軽に語ったことばの断片なのである。この記事には大岡昇平の死生観が卒直に語られているのであるが、戦後の生活を余生と考えながらも死にむかっての心の

用意を感じさせるものがある。心の用意には死の予感のようなものも常につきまとい、それは戦時の体験の私的小説に展開されるものとは質を異にするのである。生が完結され、偶然が必然に転化する場合には、主観が抹殺され、客観が活かされるが、抹殺された主観にとってはその意味するところのものは識ることができないのである。死者にとっては、偶然と必然の図式は意味をなさなくなる。悲劇はその意味で必然性でつながった客観的な視点をもたねばならぬものかもしれない。

客観的な図式の枠のなかに偶然がくり込まれるにしても、偶然が偶然としてその本質をささやかに意味するにしろ、われわれは人生にあって、看過することのできないものをもっている。だが現実的には生活の繁忙がそれにとり組む姿勢を曖昧にしがちである。したがって、偶然はその本質をあきらかにしないまま人間の心のなかをたゆまうてやまないのである。

仮構の世界にあっては、偶然はさまざまな人間関係の生起のうちに、その糸が意識して必然的悲劇の結着にむかってたぐりよせられる傾向にある。そして偶然は、あるとき必然をとびこえてみずからの跳躍する力によって死への台をふみきることもあるのである。

しかし、死がまちうけ、死が密着している偶然の深さをおもうとき、われわれは、そこで、たじろがざるをえない。偶然はもはや偶然の相をすてて、人生の本源の姿を現わしてくるからである。おどろき、詠嘆し、涙しても偶然は端然とそこに存在しているのだ。

われわれは偶然の深さを知りながら、その深さのゆえに、もつとも単純に処理しようとする習性もちすぎているのである。大岡昇平のいう「偶然の系列、つまり永遠に堪えるほど我々の精神は強くない」のかもしれない。

一つの状況がここにある。

「私は音を立てた。話声がとまった。私は立ち上り、銃で扉を排して、彼等の前に出た。二人は並んで立ち、大きく見開かれた眼が、椰子油の灯を映していた。『バイゲ・コ・ボスポロ（燐寸をくれ）』と私はいった。女は叫んだ。こういう叫声を日本語は『悲鳴』と概称しているが、あまり正確ではない。それは凡そ『悲』などという人間の感情とは縁のない獣の声であった。人類は立ち上って胸腔を自由に保たないならば、こういう声は出せないであろう。女の顔は歪み、なおもきれぎれに叫びながら、眼は私の顔から離れなかった。私の衝動は怒りであった。私は射った。弾は女の胸にあたつたらしい。空色の薄紗の着物に血斑が急に拡がり、女は胸に右手をあて、奇妙な回転をして、前に倒れた。」

（野火）

「野火」の場面である。この小説のなかにあつて、これに続く前後の状況はひとつのクライマックスにあたるところである。作者が作品を語るなかにあり自信のほどを披歴するとどうじに、苦労した箇所でもある。人を殺した主人公の処遇にこまることになったという。生きた人間を意識的に死にいたらしめることは、たとえ机の上の紙の中の世界であつたとしても、はなはだむづかしいことに語っている。

私は敗残兵として、食糧が残された山間の楽園にあり、死を予期しながら飽満な生活を過していたのである。海をながめることがかれの日課となり、夕方太陽とかれのあいだに位置を占めるとき、海岸の林のうえによく光るものを発見したのである。それは十字架であり、孤独な心憎のなかにあり、その宗教的象徴の突然の出現に戦慄した

のだった。孤独な人間の心の空虚はこの人間的映像によってしめられ、夜十字架のことを考え、少年時の思想を反省してみるのである。夢をみる。比島の男女が煽情的なポーズで踊っている。会堂があり、十字架がたしかに金色に輝き、祭壇ではミサがおこなわれ、それは葬式であつた。死者は自分の名前をもつていた。そしてするどい悲しみが心を貫く。「デ・プロフンデイス」と唇がつぶやく。断続する音とおそい下弦の月のなかに兵は降路をとるのである。かれは荒された静かな町にはいり、牙をむいて犬の吠えるなかを会堂に到る。すでに、夢は伏線になつていたことがわかる。そして引用した一つの状況が続くことになるのである。

司祭館にあり、苦しいながい眠りからさめると、歌声が聞えてきた。比島の歌で、海にむいた窓から光のように若い女の声がはいってきた。月が出て夜もおそく、男女の二人が乗つた一隻のパンカーが黒く動いているのであつた。男は舳に女は權をもつて漕ぎながら歌つていたのである。男と女は手を取り合つて笑いながら、こちらに駆けてきたのである。そして悲劇がおこつたわけである。女は倒れ、男は喚いて遁走した。

「野火」にあつて、この段階で主人公の私にはすでに狂氣の意識が潜在下にあることに注意しなければならぬことである。

私は「運命」が誤つて導いたにせよ、暴兵にすぎないとみずから納得して、神ばかりではない、人とも交わることでできない体であることを想い、山に帰ることになった。

この事件についての考察が小説の世界のなかではじまる。

「後悔はなかつた。戦場では殺人は日常茶飯事にすぎない。私が殺人者となつたのは偶然である。私が潜んでい  
た家へ彼女が男と共に入つて来た、という偶然のため、彼女は死んだのである。何故私は射つたか。女が叫んだ  
からである。しかしこれも私に引金を引かす動機ではあつても、その原因ではなかつた。弾丸が彼女の胸の致命的

な部分に当たったのも、偶然であつた。私は殆んどねらわなかつた。これは事故であつた。しかし事故なら何故私はこんなに悲しいのか。」

(野火)

「野火」のみずから招いた悲劇にはこうした思考が加わっている。

むろんこの思考は、作者として当然主人公と共存する姿勢をとっているにしても、大岡昇平自身のものと考えなければなるまい。飯構のなかにあり、作家の託する「私」について検討を加えねばならないが、戦争の体験が直接の動機になって生まれたこの作品にあつて、そのまま直接的に現われているものとみてよい。主人公の呼吸と作者の思考とは同調しているのである。人物の行動とその叙景に飯構はあつても、その思考は登場人物の行動にあわせて偽わらぬことばとみてよい。とくに、大岡昇平の経験と人生にたいする、いや戦争にたいする「私の眼」が現われているとみて間違ひはないはずである。評家によってかれの俘虜物に私的という限定が付けられるのも、ここにその理由があるものとおもわれる。

飯構の世界にあつて「私」という視点がある。客観を装いながらも「私」の視点は明記されている。そして描写の背後に「私」の視点は確固たる位置を拠点としてかためているのである。その解明は分析の結果、作家の全人的なものにやがては吸収されるはずのものであらう。「野火」の主人公田村一等兵の行動を語るにしても、そこには厳然とした大岡昇平の「私」の思考的経験が自然に露出しているのである。かれの作品のなかには戦争の体験が石畳のように敷きつめられ、その上を思考が通過しなければならぬことは疑う余地のないところである。

運命といい、神といい、偶然といい、この一連の名詞は悲劇の状況のなかに包括されていることばである。そして偶然がおかした悲劇のために「私」を背負った主人公は必然の糸に呼びよせられて山中を彷徨しなければならぬ

破目になってしまった。

大岡昇平の作品には「偶然」というのが意識的にもい比重をもって登場してくる。あるいは小説の世界での行動の思考のなかで、このことばにしばしば出会うのである。かれの生の認識からこのことばは作品の解明にあたって注目しなければならぬものであり、「偶然の系列」はかれの生の流れの底流をなすものとおもわねばならぬものである。偶然が大岡昇平の作家活動の出発にあったといっても過言ではないはずである。

偶然が重量感をいだくとき、意志をみうしなした行為の論理性をこの世界にゆだねるとしても、偶然は偶然としてとどまらなくなるのである。偶然の蓄積は悲劇の誕生の導火として意識せずにはおかぬものであり、人間の生の根源的なところに思考の力をおよぼすことになるのである。それはしかし、深淵で不可解な迷路に誘いこむことになるだけに、その追究は執拗にくり返えされることになるのだ。だから、偶然ということばは事故とともに存在することにもなってくる。物理的な単純な事実があるにしても、事故というところに、もはや、人間の力のおよばないものを感じさせるのである。偶然のなかに事故の要素を考えるとところに作者の一つの立場がある。過去の戦争体験の経歴と二十世紀という時代の様相が現われているものと判断される。そして悲しさとは物理的運動の人間的心情にたいする齟齬からくる人間の本来的なものからのものであろう。この「野火」の状況には事実がある。作者自身によって紹介されている。

ながいが比較の意味で引用する。

「勤務時間の終りに近く、奇妙な事件が起った。突然海から女の歌声が聞えて来た。歌は比島によくあるスペイン風の哀調を帯びたメロディで「サ・ビリ・モ」という恋歌である。私は幾度もそれをサンホセの女達が洗濯しながら歌うのを聞いた。黒い紡錘形の物体が、椰子の間に光る渾面をのろのろと過ぎた。歌はその物体から発し

ているらしかった。私は事態を全く理解することが出来なかった。物体は——それが小船であるのをすでに認めていた——左手の家の陰で見えなくなった。途端歌声は長い悲鳴と変った。その声を文字で現わすのはむづかしいが、強いて記せば、『おわ、あ、あ、あ、あ——』とでも言こうか。人声というよりも、何か獣の吼えるような声であつた。声はそれで途切れた。一発銃声が鳴り響いた。私は例の紡錘形の物体が、前に通つたコースを逆に、前よりも早くすぎたように思った。しかしこれはあまり確かではない。この時私は銃声のした方、つまり家の群れている方を見ていたからである。(中略) 事実はやはり私の見た通り、歌う比島の子を載せた小船が近づいたのであつた。但し一人の男の同伴者があり、男は砂におりた途端、われわれの一人に襲われ捕えられた。女が叫んだのはこの時である。しかし女はまだ船にいたのですぐ潜ぎ出した。発砲したのは機銃班を指揮した補充兵の下士官であつた。弾は当らず、船は遁れ去つた。」

(西矢隊奮戦)

事実と仮構の世界との違いが判然としてくる。「野火」にあつて遁走したのは男であり、屍体となつたのは女であつた。が事実は女が遁走し、男が捕えられた。死んだ人間はだれもいなかったわけである。女の死は強烈な印象をともしなう。孤独な兵がさらに人間界から疎外されることになった。事実は単なる奇妙な事件として終つた。偶然という不可知な要素がさし入る余地はなかつた。人間の内奥にはいり得ない外的な事件に過ぎなかつた。偶然は「私」とのかかり合いのなかで、その本来の相貌をあらわしはじめることになる。たとへば仮構の世界であつても「野火」にはその底辺に全面的に「私」が投入されているのである。偶然が問題になるところに大岡昇平の人生における貴重な経験が動きはじめるのだ。

そうでなければむしろ比重は必然の方へ重点を移動させるであらう。「偶然」とのながい付き合いに存在の意味もあつた。偶然を偶然として鎮めるところにかれの独自性が披露される。しかしそれは独自性を誇つてはいても、や



は偶然であり、たとえ完結をみても偶然でしかありえないかもしれない。必然的關係のなかにくみ替えることはできないかもしれない。余剰は依然として残る。ただ、それを清算し納得する覚悟がいるのだ。かれの偶然への系列は一つのおなじ端緒からでている。

むしろ戦場での殺人は日常茶飯事であり、あやしい人影にむかつて発砲、殺したところで当然であろう。弁明の余地すら残りえない些細事にすぎない。偶然と呼び、事故と解釈するところがひどく人間的であって、戦場の論理としては、逆に異常とさえおもわれる。ここに生きて帰ることのできた人間的な側面が掘りおこされるのである。そして、まじめに戦うことのない兵士だった作者の一面がそこに影を鮮明におとしていることに気づくのである。小説にあつてはこの状況下、二つの偶然が仮構のなかで連続して意味づけられている。男と女が入ってきたことの偶然とねらわなかったにもかかわらず胸という致命的な部分にあたつて死んでしまった偶然とである。分析すれば二連であっても、事実ならば一統きの行動とその反応とである。死という事実がなければ、本当になんでもないような事件である。二つの偶然の連続が、私をしてやがて孤独がまちうけている山間の彷徨へと帰らせることになるのである。奇妙な事件を仮構で脚色して偶然を発見するところに、大岡昇平にとつての意味があるものと考えられるのである。「わが生」を基盤において偶然は意識的にあつかわれ、重い盤を与えられることになっている。

途中、自然の循環の相を水の流れにみる。月光を映して流れる小さな川の渦に循環の運動をながめて、こうした繰り返しが自然とおなじように人生のなかにもあるべきだとおもうのである。

そして、

「昨夜からの私の行為は、この循環の中にはなかった。しかし結果は、比島の女を殺すことで終った。あれは事故であつたが、しかしもし事故が起つたのが、私がその循環からはずれたためだったとすると、やはり私の責



任である。」

(野火)

秩序と自然の循環を破壊するのが戦いの場ではなからうか。そこに責任を負うのは単独で彷徨する兵士とはいへ個の意識の強さを感じさせる。そしてひとりの死が事故であるとするところに、戦場の思考とはいへ、それが不条理をとく二十世紀の思考につながってくるのである。事故という事実には偶然のはいりこむ曖昧な領域がのこされているわけであり、自然の循環を破壊することがむしろ時代の様相だといってよい。そしてそれが女の死の「野火」の偶然に集約されているとみてよい。

またその偶然は恋愛小説では装いをあらたにして語られている。

「道子の試みが未遂に終らなかつたのは純然たる事故であつた。事故によらなければ悲劇が起らない。それが二十世紀である」

(武蔵野夫人)

みずから命を断つにしろ、あやまって人を殺すにしろ、どちらも偶然を通過して事故に到っている。二十世紀の置かれた特異な状況の表現を深部によりとることができ、もはやどうにもならない人間の一面が語られて奇妙である。意志がありながら、もうすでにその意志が意志として通らない領域に人間がおかれているのが現代であつた。戦場の論理にも、また平和を反映した恋の悲劇にあつても。

そして、不条理ということばで律しえない深さが人生にあり、不可知な世界への入口が不気味な陰影をもって横たわっていることをわれわれは意識するのである。

「愛について」を読むと偶然の展開には人生的なものよりも、時間の推理小説的な処理で解決されてゆく方法がみられる。これまでは自己の経験とあいまって、複雑さからの未整理な執拗さがあつたが、この小説にあつては偶然は連続してはいても、作者の人生がのしかかる重さは感じられない。仮構の戯れから奇抜さを感じるのである。

「三年前の五月の午後、冴子がその道ばたに車をとめていた私に声をかけたのは、運命というほかはないであろう。一つの偶然が一つの生涯の方向をきめたとしかしいようはない。」

（愛について）

一つの偶然が二人の解選を結びつけ、その運命がまた二人を離反させる力となり、死と生の世界に分けてしまうのである。大岡昇平の世界にあつて、偶然はたしかに意識されてきたものである。かれの数少ない推理小説には單純にしかでてこない偶然というものが、この小説にあつては純然たる仮構のものとして運動する形をとっている。軽々と結合し、身軽に離別するのである。あたかも生の小説的戯れのように。

偶然が深刻に問題になってくるのは、その系列が作家の人生にかかわるときである。それは俘虜物、戦記物で展開され、さらに富永太郎、小林秀雄、中原中也などの文学的山系に触れるとき、そしてまた、「幼年」「少年」と過去の不思議にとりつかれてその復元を試みるときである。偶然がおのれの生を支えたその運命を無視しえない「わが生」がそこにあるからである。運命からの偶然の系列にたいする逆探知の作用が認められる。

「一兵卒にとって戦争とは強要された偶然だ。その偶然から始まったことの必然性を、僕は僕なりに納得させなければ気がすまなかった。もともと戦史というのは作戦に当った軍人が書くべきものなのだが、比島のように恥

多き、戦場の記録はどうしてもあと回しになってしまう。僕は、これまで弱い兵隊のことばかり書いてきたが、彼らは何も知らされず、ただ戦って死ぬよりほかになかった。」

(芸生新聞)

偶然の系列にむかつての探索の出発点はあくまでも「私」である。だからその中に、完結しない自己の、完結したものの生にむかつての鎮魂の意志をもうかがいみることができるのである。

(本学第一回卒業、岡山県立倉敷背陵高校教諭)